

2025 年第 16 週の報告です。

今週の定点報告感染症は、**感染性胃腸炎**が南丹で定点あたり 21.5 件報告され新たに警報レベルになりました。**伝染性紅斑**は乙訓・南丹で警報レベルが継続しているほか、京都市でも一部の地域で警報レベルになっています。

全数報告は、**結核**が 6 件、**カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症・劇症型溶血性レンサ球菌感染症・梅毒・麻しん**がそれぞれ 1 件、**侵襲性肺炎球菌感染症**が 3 件、**水痘（入院例）**が 2 件報告されました。**百日咳**は先週よりさらに増加し 43 件の報告がありました。

また、第 15 週から**急性呼吸器感染症（ARI）**の発生報告が始まっています。ARI は急性の上気道炎又は下気道炎を指す病原体による症候群の総称です。飛沫感染等により周囲の方に向つしやすいことから、新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえ、令和 7 年 4 月 7 日から定点サーベイランスの対象となりました。仮に未知の呼吸器感染症が発生し増加し始めた場合に、迅速に探知することが可能になるものと期待されています。京都府の状況は[こちら](#)からご確認ください。

百日咳が 16 週時点で既に 192 例に上っており、京都府のホームページでも注意喚起しています（1）。百日咳は 2018 年に、全例届出が必要な 5 類全数把握対象疾患に指定されましたが、今年はそれ以降最悪のペースで感染が拡大しています（2018 年以降の府内最多は 2019 年の年間 255 例）。百日咳は百日咳菌の感染によって発症する感染症で、患者の咳やくしゃみなどで感染します（飛まつ感染）。百日咳は 0 歳児、特に生後 6 カ月未満の乳児が罹患すると肺炎や脳症を合併して重症化するリスクが高く、まれに致死的になります。乳幼児期にワクチンを接種することで罹患リスクを 80~85%程度(2)減らすことができ、ワクチンの普及とともに百日咳の発生数は激減しました。現在は 5 種混合ワクチンとして生後 2 か月から定期接種が行われています。一方で、ワクチンの効果持続期間には個人差があり、接種後数年で効果が低下してしまう人もいます。国立健康危機管理研究機構も、2023 年の発症者のうち、「全体の 50%に当たる 482 例に 4 回の百日せき含有ワクチン接種歴があり、5~15 歳未満がその 63%（306/482 例）を占めた」、と報告しています(3)。このため、日本小児科学会は学童期以降の百日咳予防目的に任意接種として 5 歳以上 7 歳未満および 11-12 歳時に 3 種混合ワクチンの接種を推奨しています（4）（注）。また、成人やワクチン接種歴のある子どもでは症状が軽めに出ることもあり、診断が遅れることもしばしばあります。咳が長引く場合や周囲で同様の咳をしている人がいる場合は、早めに医療機関を受診してください。

注：任意接種は予防接種法に基づかない接種で、一部または全額が公費負担となる定期接種

と異なり全額自己負担です。また、任意予防接種によって健康被害が起こったときは、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法による救済制度があります。

- (1) 百日咳の報告が増加しています (2025 年 4 月)
- (2) 5 種混合ワクチン | 厚生労働省
- (3) 全数報告サーベイランスによる国内の百日咳報告患者の疫学 (更新情報) - 2023 年疫学週第 1 週～第 52 週 - | 国立健康危機管理研究機構 感染症情報提供サイト
- (4) 日本小児科学会が推奨する予防接種スケジュール 2024 年 10 月 27 日版